# 青梅市文化財ニュース

第４６７号

令和８年９月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館(青梅市駒木町 1-684　℡0428-23-6859)

## 魚鼓（ぎょく、ぎょこ）

「木魚」という仏具があります。二匹の魚の意匠が施された球形・木製のもので良い音が鳴るように内部はくり抜かれています。仏教寺院のうち主に浄土宗、禅宗、天台宗などで使用され、念仏やお経の拍子を調えるために用います。「木魚」が日本において本格的に使われるようになったのは江戸時代のことで、中国から渡来した隠元隆琦《いんげんりゅうき》が本邦に持ち込んでから広まったと言われています。

この「木魚」の原型である仏具があります。それが「魚鼓」です。



写真１　魚鼓

写真は根ケ布天寧寺坐禅堂（僧堂）内にある「魚鼓」です。球形の「木魚」とは違い、文字通り魚の形をしていて、全長約１６０㎝、高さ約３５㎝、幅が３０㎝ほどの大きさで天井から吊り下げられています。

「魚鼓」の腹部に開口部があり、内部はある程度くり抜かれ音が響くようになっていて、木製あるいは竹製の棒で胴を叩き、音を出します（裏面　写真２）。



写真２　魚鼓（腹部）

口にくわえている玉は煩悩《ぼんのう》を表し、体を叩くことにより、煩悩を吐き出せるという説があるようです。中国禅宗の修行指南書『勅修百丈清規《ちょくしゅうひゃくじょうしんぎ》』に「相伝《あいつた》えて云う、魚は昼夜常に醒《さ》む。木に刻《こく》して形を象《かたど》り、之を撃つ。昏惰《こんだ》を警《いまし》むる所以《ゆえん》なり」と「魚鼓」を鳴らす理由が記述されています。これは、睡眠時に目を閉じない魚は不眠不休を表し、寝る間を惜しんで修行に励むように、という戒めの意味があります。また、『勅修百丈清規』の成立した１４世紀中頃までには、中国の禅寺において「魚鼓」が使用されており、室町時代には球形の「木魚」に先がけ、日本にも伝来していたようです。

では、この「魚鼓」は、我が国においてどのような使われ方をしているのでしょうか。実は「魚鼓」の設置されている建物は、修行僧が食事を取る場所です。そこで「魚鼓」を鳴らすと修行僧がここへ集まってきます。つまり「食事の支度が出来たので集合せよ」という合図として使われているのです。「木魚」とは全く違った使い方ですね。また「魚鼓」は別名「**梆**《ほう》」とも称しますが、この漢字は「節に小さな穴を開けた竹筒。昔、役所で呼び出しの合図に用いた」との意味を持ちます。

「木魚」とは異なり、なかなか見る機会の少ない「魚鼓」ですが、黄檗宗《おうばくしゅう》や曹洞宗の修行道場（修行僧を受け入れて修行を行う、または行なっていた寺院）で目にすることができます。

（文責　沖　祐昭）